

ESD における持続可能なライフスタイルを実践的に考える ～SOHUM「アースミュージアム」プロジェクト報告～

岩本 泰^{*1}・近藤 真由^{*2}・梶井 龍太郎^{*2}
室田 憲一^{*1}・二ノ宮リムさち^{*3}

1. はじめに
2. SOHUM「アースミュージアム」プロジェクト 2022 年度報告
3. おわりに
4. 謝辞

1. はじめに

国連 持続可能な開発目標（SDGs）に関連して、教育の目標にはゴール 4「すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」がある。このゴールでは、国連広報センターによる 2018 年の翻訳であるが、以下のように説明されている¹⁾。

質の高い教育機会を得ることは、持続可能な開発を生み出すための基盤です。包摂的な教育へのアクセスは、生活の質を改善するだけでなく、世界の最も大きな課題に対する革新的な解決策を考案するために必要なツールを各地の人々に与えることにも役立ちます。

学校に通えていない子どもは現在 2 億 6,500 万人に上りますが、そのうち 22%は小学校就学年齢の子どもたちです。また、学校に通えている子どもでも、基本的な識字・算術能力が欠けています。過去 10 年間で、あらゆるレベルの教育へのアクセス改善と、特に女性と女兒の就学率向上に向け、大きな前進が達成されました。基本的な読み書きの能力は大幅に向上しましたが、普遍的な教育目標を達成するためには、さらに長足の進歩が必要です。例えば、世界は初等教育で男女の平等を達成しましたが、すべての教育レベルでこのターゲットを達成した国はほとんどありません。

質の高い教育が欠けている理由としては、十分な訓練を受けた教員の不足、校舎の劣悪な状況、農村部の子どもに提供される機会に関連する公平性の問題が挙げられます。貧困家庭の子どもに質の高い教育を提供するためには、奨学金制度や教員養成ワークショップ、校舎の建設、学校への水道と電力の供給改善に投資する必要があります。

これらを読むと、基礎教育へのアクセス向上、ジェンダーフリーな子どもたちの未来のエンパワーメント向上、都市と農村の格差解消など、一見発展途上国・後進国の教育支援の問題のように見えるかもしれない。しかしながら、重要なのはハードの問題だけでなく、どのような内容を実践するか、教育の質（Quality of Education）が重要な側面として含まれていることを強調したい。この点は、SDGs17 のゴールに含まれている 169 のターゲットに見ることができる。例えば、4.7 には、以下のようなことが示されている²⁾。

2030 年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和

及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。

SDGs の教育を考えると、ここにすべてが集約されていること、世界の教育にコミットしているユネスコが目標策定に深く関与していることを強調したい。対立と分断、ヘイトやフェイクに満ちた情報にさらされる今、2030 年までの高等教育の意義、求められ内容がここにある。ここでは、持続可能な開発のための教育（ESD）と持続可能なライフスタイルに焦点化する。

2. SOHUM「アースミュージアム」プロジェクト 2022 年度報告

「アースミュージアム」プロジェクト授業では、環境・経済・社会のつながりやかかわり、地域や文化の価値を考えることを授業のねらいとして位置づけ、教育実践を展開してきた。特に、過度の商業的利益や経済的効率性追求といった点に対して批判的思考を持ち、一人一人が共に生きることができる公正な地球社会づくりへの具体的な参加について考え、行動する人を育てることを重要視している教育活動である。

2022年度のプロジェクト授業では、学内授業（人間学2）に加え、12月10日に、相模原市・ユニコムプラザさがみはらで教養セミナー「今考えたい『サステナブル（sustainable）』『エシカル（ethical）』とは～持続可能なライフスタイルの実践を考える～」を開催した。このプロジェクトは、本学部の学生が専門能力を生かして協働しながら、それぞれが役割を担い、社会的な課題を解決する行動力を磨くことを目的に展開された。今回のセミナーは、ウクライナの伝統的な「刺繍文化」の素晴らしさを知るとともに、文化や作品、原材料（オーガニック）の「サステナブル」と「エシカル」消費を考え、つながり、協力・協働の可能性を探ることを目的に企画したものである。当日は、本学部の学生有志や刺繍・綿に関心を持つ一般参加者約30名が参加した。



図1:刺繍愛好家 イリナ・ベトロワ氏

開会にあたり本企画を説明、「2022年2月から始まったロシアによるウクライナ侵攻を受けて、この問題をどのように受け止め、学びを深めていくか考えてきました。教養学部は『人と文化』を学ぶコースですので、ウクライナの刺繍文化を通して、持続可能性やウクライナへのこれからの協力・協働・共生について考えていければ

と思い企画しました」とイベント趣旨が紹介された。続いてウクライナ出身の刺繍愛好家であるイリナ・ベトロワ氏が「今考えたい、ウクライナの文化と手刺繍世界の魅力」と題して講演。ウクライナにおける刺繍の歴史や模様を紹介するとともに、自身が刺繍を始めた経緯を紹介し、「祖母に教わって私は4歳から刺繍作りを始めました。刺繍の方法は地域によってさまざまに300種類以上あると言われており、模様に関しては数えきれないほどあります。伝統衣装である『ソロチカ (sorochika)』に刺繍することが多いですが、それを普段のファッションに取り入れて着る人やバッグに刺繍する人など、ウクライナ人にとって刺繍はとても身近な存在です」と話をしていた。

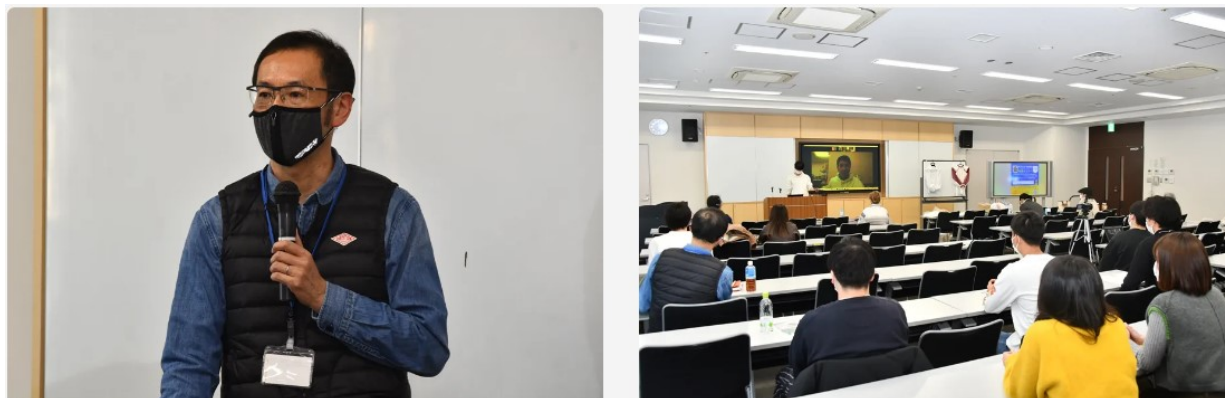


図2: 稲垣貢哉氏(左)と古賀義政氏(右・画面上)

また、Textile Exchange アジア地域アンバサダーを務める一般社団法人 M. S. I. の稲垣貢哉氏が「オーガニックコットンについて考える」をテーマに講演。オーガニックコットンの普及率について説明し、「全綿花製品の中でオーガニックコットンは1.4%と言われており、まだまだ普及していません。ですが、生産数が近年徐々に上昇傾向にあり、今後普及が進んでいくと考えられます」と話題提供した。さらに、綿花の生産数世界1位を誇るインドの農家における製造方法や環境への配慮についても解説した。

そして、株式会社イケヒコ・コーポレーション品質保証部の古賀義政氏が、同社の畳表に使われているイネ科の「い草」の相続に向けた活動・イベントなどを紹介するとともに、近年力を入れているこたつ布団や座布団などオーガニックコットンを用いた新たな商品開発について説明した。



図3: 刺繍ワークショップの様子

話題提供の後には、ベトロワ氏の指導による刺繍ワークショップも実施。学生が玉結びをせずに縫い上げるウクライナ独自の刺繍について学び、クリスマスが近いことからツリー飾りを制作した。参加した学生は、「ミシンを使わない手刺繍でこれだけ複雑で細かな作業をしていることに驚きました。玉止めをしない縫い方は新鮮で貴重な体験でした」「日本ではほとんどの人が和服を日常的には着ていないので、ウクライナの人の伝統へのリスペクトと文化の違いを感じました。また、オーガニックコットンへの理解も深まったと思います」といった感想を話

していた。

3. おわりに

今回は、ESD の新しい可能性を探りつつ、ウクライナの刺繍愛好家や繊維業界関係者にご協力をいただいた。一方で、ウクライナ紛争は、2年の月日が経過し、平和と共生の課題をどのように考えるのか、私たちに突き付けられている。そのような問題に正面から考えると同時に、多文化共生の問題として考えることも今後長い復興のプロセスで必要になると考える。国際情勢を鑑み、これからの市民社会を考え、行動し、変革するために、教育実践として継続して取り組まなければならない、ということが明らかである。

ゴール4に関連して、日本ユニセフ協会の制作協力で作られた本では、今後「職業教育・訓練など、大人になってからもずっと学べる機会や環境をととのえ、持続可能な開発を進めるのに必要な知識と技術を身につけるようにする」ことこそ、目指すものであると示している（大山 2018）。持続可能な社会の担い手となる多様な立場の市民、とりわけ若い世代が文化について実践的に考え、さらに多様なステークホルダーが参加できる企画を検討していかなければならないのではないかな。

4. 謝辞

本実践は、2022年度の東海大学教養学部教育研究補助金により実施された。関係各位に感謝申し上げます。また、刺繍愛好家であるイリナ・ベトロワ氏、一般社団法人 M.S.I.の稲垣貢哉氏、株式会社イケヒコ・コーポレーション品質保証部の古賀義政氏、本イベントにご協力・ご参加いただいたすべての皆様には、本プロジェクト実践に参加した学生の成長のきっかけとなる機会をいただいた。改めて、この場にて深くお礼を申し上げます。

注

1) 以下サイトを参照。

https://www.unic.or.jp/files/Goal_04.pdf （最終確認日 2024年2月5日）

2) 以下サイトを参照。

https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/000101402_2.pdf （最終確認日 2024年2月5日）

出典：

大山 泉（2018），知っていますか SDGs ユニセフとめざす 2030年のゴール，さ・え・ら書房，p.36.